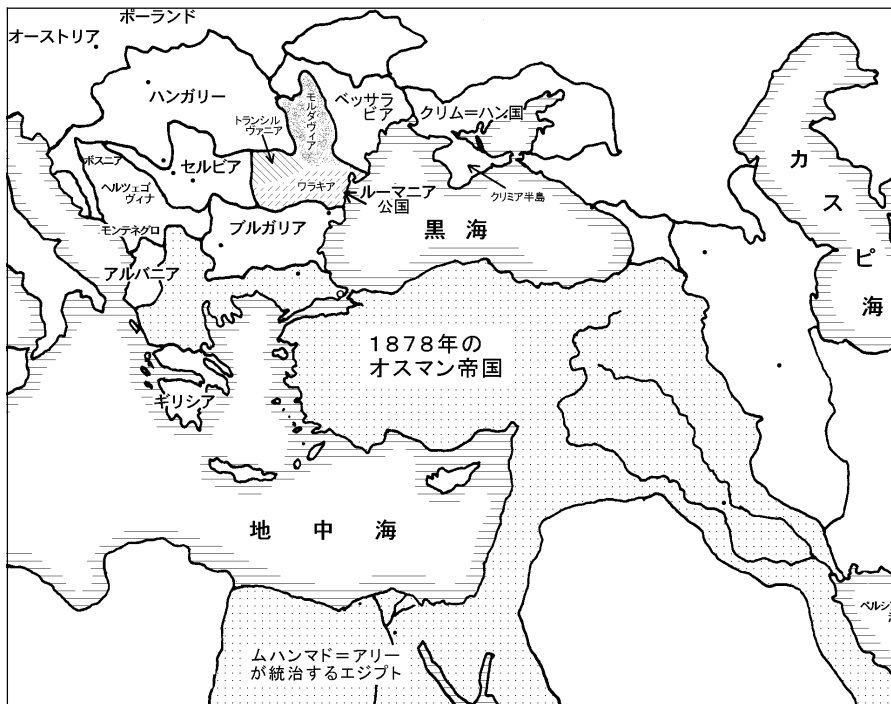


《概観》南アジア、東南アジアの多くは西洋諸国の植民地として世界分業体制に組み込まれたが、オスマン帝国、清朝、日本などは近代的改革を急いで植民地化を阻止しようと努力した。



## 変容するオスマン帝国

- 1) オスマン帝国はメフメト4世 位1648-87の17世紀半ばに領土が最大になり、国内経済も着実に成長した。特産品は綿花、オリーブで、羊毛、食肉等の生産も活発だった。
- 2) 教科書はもちろん参考書でも省略されているが、実は17世紀後半、オスマン帝国はオーストリア、ポーランド、ヴェネツィア共和国との間に半世紀にも及ぶ長期戦争を行っていた。この長期戦争に特に歴史的名称はない。劣勢打開のため、オスマン帝国は1683年、第二次ウィーン包囲を行ったが、ポーランド王などの援助を得たオーストリア軍に撃退され失敗した。これが軍事面での衰退のはじまりであった。

「トルコの脅威」を印象づけたスレイマン2世の第一次ウィーン包囲(1529年)とは雲泥の差である。

なお、最大版図を記録したメフメト4世は【1: 】(1683)に失敗して幽閉された。前述の長期戦争の講和条約が1699年の【2: 】である。オスマン帝国と{オーストリア・ポーランド・ヴェネツィア共和国}との講和条約で、この条約でオスマン帝国は初めて大規模な領土喪失を経験した。①ハンガリーの大半、②トランシルヴァニアをオーストリアに割譲。

- 3) 18世紀前半、アフメト3世 位1703-30の治世は、【3: 】(厳密には1718~1730)と呼ばれている。オスマン帝国原産のチューリップの品種改良が行われ広く愛好されたのでこういう。1718年のバッサロヴィッツ条約で、ワラキア西部(パナト地方)・セルビア北部・ボスニア北部などをオーストリアに割譲するという、さらなる領土喪失と引き替えに国際関係は安定。ヨーロッパではオリエン特趣味が広まり、オスマン帝国の文化が高く評価された。オスマン帝国もフランスを中心とするヨーロッパ文化を積極的に取り入れた。同時期のロシア皇帝はロシアを帝国にしたピョートル1世(大帝 位1682-1725 11J)だったが、オスマン帝国は、1711年にはピョートル大帝のロシア軍をプルートの戦いで破り、その侵攻を一時食い止めた。しかし、帝国の危機は静かに進行していた。
- 4) 18世紀、オスマン帝国の中央集権体制は大きく緩み、弱体化した。

- ①軍事封土制(ティマル制 ※1)は徐々に崩れ、【4: 】にかわった。徴税を請け負ったのは、農業や商工業を基盤として台頭した【5: 】(あるいは地方名士、地方豪族)である。彼らは地方勢力として自立し、オスマン帝国の分権化、弱体化が進んだため大きな課題を残した。
- ②エジプト、チュニジアなどの属州では、それぞれの地を実質的に支配する勢力が自立し、中央集権体制は大きく緩んだ。たとえば、エジプトの実質的支配者ムハンマド=アリー(総督1805年~ 正式には1806年~)。
- ③ロシアの【6: 】位1762-96と2度にわたって戦争したが、この戦争にも特に歴史的名称はない。これを「1768年からのロシア=トルコ戦争」と表現する教科書もある。クリミア戦争(1853-56)、ロシア=トルコ戦争(1877-78)に1世紀近く先立つ、このロシアとの2度の特に名前のない戦争の講和条約が、1774年の【7: 】である。この条約でオスマン帝国はこんなことになってしまった。

【7】は教科書掲出度数が低いのに頻出。なお、両国は18~19世紀にかけてこれら以外にも戦争をしている。

- a) クリミア=ハン国の支配権を放棄させられた。→【8: 】は実質ロシアのもの。長く宗主権を保ってきたクリミア半島のムスリム住民が異教徒の支配下に入ることは、大きな衝撃であった。
- b) ロシアに【9: 】の自由航行権を与えた。ただし、両海峡を自由通航できるのは商船だけ。※2
- c) ロシアにオスマン帝国内に住むギリシア正教徒の保護権を与えた。→後に大変なことに・

- ④そして、1798-99年、ナポレオン指揮下のフランス共和国軍が属州のエジプトを占領。ナポレオンはエジプトの人々にオスマン帝国に対する抵抗を呼びかけた。
- ⑤フランス革命の影響を受けてギリシア独立運動がすでに始まっており、1821年にギリシア独立戦争が始まる。詳細は別に述べるが、1829年にギリシアの勝利に終わる。このとき、ロシアはギリシア側についたが、それでもロシアの南下は阻止され続けていた。

※1 軍人に給与の代わりに一定地域の徴税権を与えるイクター制(10世紀)を継承した制度。

※2 クリミア半島を得たロシアは念願の不凍港を手に入れ、黒海自由航行まで確保したが、エーゲ海(従って地中海)への出口である2つの海峡を自由に通航できるのは商船だけだった。第一次エジプト・トルコ戦争でオスマン帝国を支援した代償として、ウンキヤル・スケレッシ条約(1833)でロシアにダーダネルス・ボスフォラス両海峡の自

由通行権を与えたが、五国海峡協定（1841）で両海峡は中立化された。

## オスマン帝国の改革

オスマン帝国はヨーロッパの脅威と地方勢力の台頭で、18世紀末、一層弱体化しはじめた。恩恵として与えた「カピチュレーション」は、今や治外法権等の**不平等条約**の役割を果たしていた。

- 1) 【10: 】 #28スルタン 位1789-1807 による改革 何代目のスルタンかを#をつけた数字で示す。以下同様  
西欧式の新軍隊【11: 】を創設するなど近代西欧モデルを体系的に取り入れた近代化政策を進めたが、イエニチェリら保守層の反発は強く、暴動で廃位され、殺害された。【11】も一時廃止された。  
【11】は新軍隊の名称だが、セリム3世の行った改革の名称（新秩序という意味）としても用いられることがある。
- 2) 【12: 】 #30スルタン 位1808-39 による改革（特に名称はない）。フランスとの同盟関係を破棄。
  - ①【13: 】を討ち、従わせる。
  - ②近代的な西欧式の新軍隊を復活させ、1826年、特権階級と化した【14: 】を廃した。  
イエニチェリは17世紀には軍規が乱れ横暴な行動をするようになり、18世紀には特権階級化した。
  - ③徴税・行政制度の改革、教育・郵便制度の導入などを行う。なお、**啓蒙専制君主**として知られる。**マフムト2世の治下**のできごと。……改革は守旧派の反対でしばしば停止させられた。  
1821～29年、ギリシア独立戦争に敗北。その後、自立化をはかる**ムハンマド=アリー**と戦う。  
1827年、はじめてヨーロッパに留学生を送り出した。／**ワクフの改革**を行った（年不明）。  
1838年、イギリスと【15: 】を締結した。**関税自主権がなく、不平等条約のモデル!**  
イギリス人商人の権利だけを保障する極端な不平等条約。その悪弊は徐々に現れ、ヨーロッパの工業製品が流入し、国内の伝統的手工業は壊滅し、ヨーロッパに経済的に従属する傾向が強まった。この条約は事実上ムハンマド=アリーが統治するエジプトにも、ロンドン会議(1840)以降適用され、エジプト経済に重大な影響を与えた。
- 3) 1839年、【16: 】 #31スルタン 位1839-61 は【17: 】を發し本格的改革に着手した。  
トプカプ宮殿内の薔薇園（ギュルハネ）で読み上げられたためこう呼ばれた。  
その勅令の内容は、《国民は**宗教にかかわらず**法の前に平等で、生命・財産の安全を保障される》というもの。つまり、非ムスリムもムスリムも同等の権利、ということになる。  
軍隊・司法・行政などを改革し近代的国家体制をととのえようとする試みを始めた。  
**法の力がスルタンの権力より上位にある**ことが明示された。これには独立をめざす非ムスリム諸民族をオスマン帝国につなぎとめる意図もあった。司法・行政・財政の西洋化が試行され近代国家としてのしきみがようやく整ってきた。これらの改革の全体をさして、【18: 】（=恩恵改革）と言う。言葉としては「制度化」という意味。また、1856年に「改革勅令」を出して非イスラーム教徒の政治的諸権利の尊重を宣言した。上からの改革であり、守旧派の抵抗が強く、【16】は、1858年以降は意欲を失い、十分な成果をあげないまま挫折した。
- 4) タンジマートの最中の1853年、ロシアがオスマン帝国内のギリシア正教徒の保護を名目に【19: 】 1853-56 を始めた。オスマン帝国は、イギリス、フランスの支援を得て勝利し、パリ条約でロシアの南下政策を一時ストップさせたが、膨大な戦費で財政が破綻した。これ以前も度重なる戦争遂行のために外債に依存する体質になっていたところへ、クリミア戦争の大出費、1873年にはじまったヨーロッパの大不況の影響をもろに受け、オスマン帝国は完全に破産した。

## 解体に向かうオスマン帝国

民族主義の高揚と列強の侵出で帝国解体の危機を迎える。

- 1) ギリシア人、アルメニア人などキリスト教徒が力を強め、西欧で成立した民族主義の影響で、セルビア人、ブルガリア人などが民族意識をもとに独立や自治を求め、帝国解体の危機を迎えた。
- 2) オスマン帝国の知識人は1860年代から《オスマン帝国の臣民は民族・宗教のちがいをこえた平等な**オスマン人**である》という【20: 】※3に立脚し「**新オスマン人**」としての自覚にめざめ、**立憲制**をめざす運動を始めた。1876年、革新派官僚でアブデュル=ハミト2世（位1876-1909）の宰相だった【21: 】任1876?-84 が起草した憲法案が圧倒的な支持を得て憲法として発布された。これが、**ミドハト憲法**である。スルタンの権限などを明文化、二院制議会と責任内閣制をとる憲法で、**アジアで最初の憲法**である。1877年、議会が開設された。
- 3) しかし、1877年、ロシアがバルカン半島のスラヴ系民族の保護を名目に【22: 】 1877-1878 をはじめた。議会の政府批判を嫌悪した【23: 】 #34スルタン 位1876-1909 は、1878年の露土戦争完敗を口実に憲法を停止し※4、議会も解散させ、皇帝による専制政治を復活させた。**ミドハト憲法**の発布(1876)から停止(1878)までの1年2ヶ月をオスマン帝国における**第一次立憲制**と呼ぶ。憲政の復活は、1908年の青年トルコ人革命まで待たねばならない。
- 4) ロシア・トルコ戦争 1877-78 は、オスマン帝国の敗北に終わり、1878年の**ベルリン条約**で、バルカン半島の領土の過半を失った。諸民族の自立の動きは更に強まり、戦後も独立が相次ぎ、バルカン半島のほとんどを失った。  
ブルガリア（1878年自治/1908年独立）・ルーマニア（当時は「モルダヴィア・ワラキア」1856年独立）・セルビア（1878年独立）  
このつづきはNo.146  
※3 このような思想を批判したのは、イラン出身の思想家アフガーニー 1838/39-97 である。彼はパン=イスラーム主義を主張した。  
※4 彼は自分を支えてきたミドハト=パシャを罷免しアラビア半島に流刑にしたうえ抹殺した。しかし、領内諸民族の反抗と列強の侵略に対処できず、**青年トルコ革命(1908)**の後廃位された。

## 2006早稲田（抜粋）

誤りを含むものをつ選びなさい。

正解 エ

- ア レパントの海戦でオスマン艦隊はスペイン連合艦隊に敗北し、地中海の覇権を失った。
- イ 1683年に行った第二次ウィーン包囲は失敗に終わり、カルロヴィッツ条約によりオスマン帝国は領土の一部を失った。
- ウ 18世紀後半、ロシア皇帝エカチェリーナ2世の侵攻を受けたオスマン帝国は、キュチュク=カイナルジ条約によってクリム=ハン国を失った。
- エ ギリシア独立戦争の際にイタリア海軍がギリシア側に介入し、オスマン帝国の主力艦隊を壊滅させた。